論　文　要　旨

鹿児島大学

緩和的化学療法中止後から死別までのがん患者の配偶者の体験：質的研究
Experiences of Spouses of Patients with Cancer from the Notification of Palliative Chemotherapy Discontinuation to Bereavement: a Qualitative Study

氏　　名　　久松　美佐子

［緒言］近年のがん化学療法では、新薬の開発が目覚ましく、根治が望めない患者に緩和的化学療法が選択されることが多い。これまでの研究において、このような患者を介護する家族は、精神的健康を脅かすほどストレスフルな体験をしており、その体験の仕方が死別適応の危険因子になりうることが明らかにされており、早期からの緩和ケアの介入が勧められている。しかし、日本では、死別近くまで治療が続けられることが多いため、治療中止後の衝撃が大きいことが推測される。また、これらの影響は、配偶者への影響が特に大きいとされるが、日本人は感情表出の抑制傾向があり、配偶者の感情体験は外的に認知されづらい。そこで、本研究は、日本において緩和的化学療法中止から死別までのがん患者配偶者の体験を明らかにすることを目的とする。
［方法］緩和的化学療法を受けたがん患者の配偶者を対象に、半構造的面接を1人つき2回行った。1回目は、治療中止後に「どのようなことを感じ、考え、過ごしたか」について聴取した。2回目は、死別後に、前回面接後の体験を聴取した。分析は、参加者自身の語りから主観的体験を明らかにすることを目的とした為、グランデッドセオリーの分析手法を参考に行った。オープンコード化では、データ全体を読み込み切片化しコードを付け、コード化した意味単位を比較してサブカテゴリを抽出し、それらを比較検討してカテゴリを抽出した。次いでアクシャルコード化では、現象を説明できるように特性と次元を使ってカテゴリ同士を関連づけた。その後、ストーリーラインを明らかにした。カテゴリの抽出過程について、質的研究の専門家を含む5名の研究者で分析の明晰性を検討し、最終的に合意決定した。
本研究は、研究者の所属機関および調査施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象者には、文書と口頭で説明し、研究協力への同意を署名により得た。
［結果］研究参加者は13名であった。以下のA～Fの6カテゴリが抽出され、ストーリーラインは以下の通りであった。緩和的化学療法中止の説明を受けた患者の配偶者は、A：緩和的化学療法の中止への戸惑いが強く、B：死別に直面する難しさを体験していた。その背景には完治不能と言われつつも緩和的化学療法で得られた延命効果によりC：生存への願いを断ち切れない願いがあった。そして、患者の状態が悪化する中で、D：終末期介護への当惑が増強するものの、E：患者に正直に向き合うことのためらいが強く、F：死別まで患者と一緒に過ごす方法を探ることをしながら看病するという体験をしていた。
［考察］緩和的化学療法中の配偶者は、延命を目的とした治療であることを知りつつも、治療効果がみられたことで治療への期待が膨らみ、治療中止になることに大きな衝撃を受けていたといえる。そして、初めて死別を自分に降りかかる現実的な問題と捉え、そこから本格的な予期悲嘆を体験していたと考える。また、配偶者は、患者に対して本音で向き合うことにためらい、死別までの患者との過ごし方を模索していた。多くの配偶者は、患者が動揺するのを恐れて、死が近いことを告げていなかった。相手の思いを推し量り行動するのは日本人の特徴といえるが、患者がどんな思いを持ち、何を望んでいたかを知らずに、患者の思いを叶えられなければ、死別後の後悔になりうると考える。
以上より、看護者は、治療の中止後に配偶者が予期悲嘆に直面し不安定な状態になることを理解した上で、状況に対処し予期悲嘆のプロセスを体験できるよう支援する必要性が示唆された。
［結論］緩和的化学療法中止後の配偶者の体験は、治療できないことで初めて死別を現実的に捉えるようになるが、その一方生存の望みを絶ち切れず死別に向き合うことに困難を要するものであった。そして、死別までの間、患者とどう向き合いどう過ごすか模索する体験であった。

European Journal of Oncology Nursing (Article accepted for publication 13 Jan 2020)
IF: 2018 Impact Factor:1.697　5-Year Impact Factor: 2.317